

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380898

研究課題名(和文)「循環型いじめ」生成・持続メカニズムの解明と予防・解消方法の開発

研究課題名(英文) Elucidation of the Generation and Persistence Mechanisms of "Cyclic Bullying" and the Development of Methods for its Prevention and Elimination

研究代表者

三島 浩路 (MISHIMA, Koji)

中部大学・現代教育学部・教授

研究者番号：90454371

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「いじめ」被害者と加害者が入れ替わる、「循環型いじめ」について検討した。具体的には、「いじめ」被害者が加害者となるメカニズムを、拒絶感受性という個人特性との関連から明らかにすることを試みた。

はじめに、小学生・中学生・高校生用の拒絶感受性尺度をそれぞれ開発した。次に、「いじめ」被害感覚に拒絶感受性の「対人関係の不安定感」因子などが影響を与え、「いじめ」被害感覚が、拒絶感受性の「拒絶に対する怒り・反撃」因子に影響を与え、さらに、「拒絶に対する怒り・反撃」因子が攻撃傾向に影響を与えるというモデルの検証を行った。その結果、モデルの妥当性を示唆する結果が得られた。

研究成果の概要(英文)：This study examines "cyclic bullying" in which the victim and the perpetrator of bullying are interchanged. Specifically, we attempt to clarify the mechanism by which victims of bullying become perpetrators and its relationship with the individual characteristic of rejection sensitivity. First, a rejection sensitivity scale was developed for elementary, junior high, and high school students. Next, the author verified the model in which the "feelings of insecurity in interpersonal relationships" factor of rejection sensitivity affects the "bullying" victim sensibility factor, which, in turn, affects the "anger toward and counterattacking rejection" factor of rejection sensitivity. The "anger toward and counterattacking rejection" factor, in turn, affects the attacking tendency. Results obtained indicated that the model was valid.

研究分野：学校心理学

キーワード：いじめ 拒絶感受性 循環型いじめ

## 1. 研究開始当初の背景

関係性攻撃による攻撃を主たる攻撃の手段として、被害者であった児童・生徒が加害者となったり、加害者であった児童・生徒が被害者になったりするように、被害者と加害者が入れ替わり、相互に何らかの関係がある児童・生徒の集団内で、いじめ被害・加害者が循環するような「いじめ」を「循環型いじめ」とする。イギリスやノルウエーをはじめ多くの国で行われた「いじめ」予防・解消に関する研究をまとめた文献 ( Smith, Pepler, & Rigby, 2004 ) によれば、直接的な攻撃による「いじめ」に比べて、関係性攻撃による「いじめ」に対する有効な予防・解消策は極めて少ない。また、「いじめ」に関する国内での実践をレビューした結果 ( 三島, 2010 ) , 関係性攻撃による「いじめ」の予防・解消の難しさが指摘されており、国内の実践・研究においても、効果的な予防・解消策が見いだされていない。

関係性攻撃による「循環型いじめ」の存在に関しては、いくつかの事例が報告されている ( e.g., Harachi et al., 1999 ) 。 Ma ( 2001 ) は、「循環型いじめ」についてこれまでに十分な研究がなされてこなかった点を指摘し、こうしたタイプの「いじめ」に関する研究の必要性に言及している。オーストラリアの中学生・高校生約 4,000 人を対象に行った調査 ( Herbert et al., 2004 ) の結果でも、被害経験と加害経験との相関が高いことが報告されており、その背景として、「循環型いじめ」の存在を著者は示唆している。「循環型いじめ」に対する関心は高まっているが、我が国においてはこれまで実証的な研究は行われていない。また、先に紹介した海外の研究においても、「循環型いじめ」が生じやすい環境に関する考察 ( Ma, 2001 ) は行われているが、「循環型いじめ」が起きるメカニズム等に関する検討はなされていない。

## 2. 研究の目的

被害者と加害者とが入れ替わる「循環型いじめ」が起きるメカニズムを明らかにする。

## (1) 「循環型いじめ」との関連が予想される拒絶感受性

拒絶感受性を測定する尺度としては、Rejection Sensitivity Questionnaire ( RSQ ) が、Downey & Feldman ( 1996 ) により開発されており、子供用の尺度として RQS と同様の構造をもつ Children's Rejection Sensitivity Questionnaire ( CRSQ ) が、Downey, Lebolt, Rincon, & Freitas ( 1998 ) により開発されている。学校教育環境が国により異なるなどの理由で、この尺度を本研究でそのまま利用することができない。そこで、小学校高学年用、中学生用、高校生用の拒絶感受性尺度を開発する。

## (2) 「いじめ」被害者・加害者が入れ替わるメカニズムの検証

「循環型いじめ」の特徴である被害者・加

害者の双方になりやすい個人の特性に着目して探索的な検討を試みる。

いじめられている・攻撃されていると感じる感覚には個人差がある。仲間やクラスメイトが行う曖昧な行動を、自分に対する意図的な攻撃と解釈する傾向が強い児童・生徒は、攻撃を意図していない仲間やクラスメイトの行動に関しても、自分に対する意図的な攻撃と解釈しやすいために、学校生活の中で自分が意図的に攻撃された・いじめられたと感じることが多くなる。意図的な攻撃を受けたりいじめられたりしたという感覚は、相手に対する攻撃 ( 反撃 ) 行動を促進する。怒りの感情が身体的な攻撃を促進しやすい子どもは、相手の肩が自分に触れたような相手の攻撃意図が曖昧な行動に対しても、より強い敵意を相手に対して感じることから ( Dodge, 2006 ) , 相手の曖昧な行動を自分に対する意図的な攻撃と解釈しやすい子どもほど攻撃的になりやすい。

攻撃行動には、殴ったり蹴ったりする身体的な攻撃のほかに、仲間はずれにしたり無視したりする関係性攻撃が知られている ( e.g., Crick, 1995; Crick & Grotpeter, 1995; Tremblay, 2000 ) 。身体的な攻撃だけでなく、関係性攻撃に関しても、相手の行動を自分に対する意図的な攻撃と解釈しやすい子どもは、相手に対する反撃としての攻撃行動を行いやすい。

Crick, Grotpeter, & Bigbee ( 2002 ) が小学生を対象に行った研究では、関係性攻撃を示す子どもは、関係性攻撃による挑発的な場面において相手に強い敵意を感じることを示された。Ostrov ( 2010 ) が行った縦断研究から、関係性攻撃により被害を受けることが、関係性攻撃に関する加害傾向に影響を与えることが示唆された。Yeung & Leadbeater ( 2007 ) が 9 ~ 11 歳の子どもを対象に行った研究では、関係性攻撃の被害経験と加害経験との間には関連があり、被害経験が多い子どもほど加害経験も多いという結果が得られた。さらに、Dodge, Lansford, Burks, Bates, Pettit, Fontaine, & Price ( 2003 ) による縦断研究では、小学校低学年 ( 6 - 8 歳 ) で仲間から拒否されることが、高学年 ( 10 - 12 歳 ) になった段階での攻撃行動と関連し、両者の関係を媒介する認知的な要因の影響が示唆された。Lansford, Malone, Dodge, Pettit, & Bates ( 2010 ) は、仲間から拒否されることが相手に対する敵意や攻撃行動に関連し、そうした敵意や攻撃行動が、さらに、その後の仲間からの拒否と関連することを示した。

本研究においては、いじめられたという被害感覚をもちやすく、相手の攻撃行動に対する反撃というかたちで攻撃的な行動をしやすい個人の特性と、「いじめ」被害・加害との関連を検証する。具体的には、「いじめ」被害者が加害者となるメカニズムについて、拒絶感受性が関連することを想定したモデル ( 図 1 ) を作成し、モデルの検証を行う。

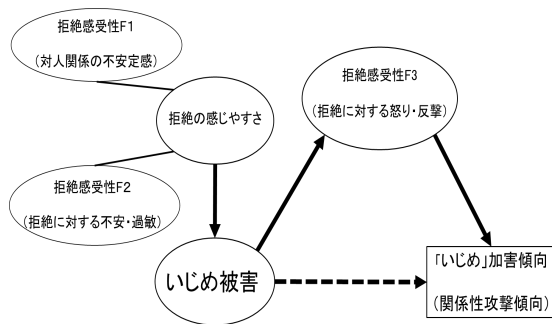


図1 本研究で検証を目指す基本モデル

### 3. 研究の方法

#### (1) 拒絶感受性の測定

本研究では、小学校高学年用・中学生用・高校生用の拒絶感受性尺度をそれぞれ作成し、尺度の信頼性・妥当性の検証を行う。

##### 小学校高学年用拒絶感受性尺度

A市内にある3つの小学校に在籍する小学4～6年生392人を対象に調査を行った。欠損値があるものは分析から除外したために357人のデータを分析に用いた。なお、尺度の安定性を確認するために、一つの小学校では2回の調査を実施した。

調査内容：Downey & Feldman(1996)が開発したRSQや、Downey et al.(1998)が開発したCRSQを参考にして、小学校の現職教師5人の協力を得て、原尺度の作成を行った。CRSQでは、拒絶を感じさせられるような12の状況を設定しているが、これらの状況の中には、日本の一般的な小学生にはなじまないものもあった。そこで、これらの尺度が測定しようとしている内容をもとにして、日本の小学生の現実の生活場面を想定し、Downey & Feldman(1996)が拒絶感受性の定義として挙げている「他者から拒絶されることを不安感を伴って予期しやすく、拒絶されることに敏感であり、拒絶に対して過剰に反応する個人の特性」を参考にして、「仲間からの意図的な拒否を憶測する」「仲間関係に関する不安」「仲間からの拒絶に対する敵意」という3つの側面から拒絶感受性を測定するための項目を作成した。具体的には、「仲間からの意図的な拒否を憶測する」という特徴をもった小学校高学年児童の友人関係に対する考え方や行動等を、5人の小学校教師にそれぞれ3つずつ短い言葉でまとめさせカードに記入させた。このカードをテーブルに並べ、5人の教師が相談して、内容が類似しているカードを一つにまとめた。こうしてできたカードのまとめ全体をみわたして、「仲間からの意図的な拒否を憶測する」という特徴をもった小学校高学年児童の友人関係に対する考え方や行動等として不足している要素がないかどうかを検討し、不足している要素がないことを確認した後、カードのまとめごとに、小学4～6年生が5件法で回答することを前提に質問の言葉遣い等を吟味して、

「仲間からの意図的な拒否を憶測する」を測定するための調査項目を決定した。「仲間関係に関する不安」「仲間からの拒絶に対する敵意」についても、同様の方法で調査に用いる項目を作成した。こうした手順で17項目からなる原尺度を完成させ、質問紙調査に利用した。

本研究においては、小学生の学校適応感や対人関係との関連を調べ、尺度の妥当性を検証するために、階層型学級適応感尺度(三島, 2006)の15項目、仲間集団指向性尺度(三島, 2008)の「独占的な親密関係指向」に関する8項目(例：自分のいちばん大切な友だちを、ほかの子にとられそうで心配になることがある。新しい友だちをつくるとき、今、仲良くしている友だちのことが気になる)、さらに、伊藤・松井(2001)が開発した「学級風土質問紙」を参考にして学級の排他的な雰囲気測定する5項目(例：クラスの中に、ほかの人と一緒にいたがらない「仲良しグループ」がある。このクラスには、だれとても自由に話ができる雰囲気がある(反転))を用いた。

##### 中学生用拒絶感受性尺度

A県立B・C高等学校に進学する中学卒業生560人を対象に調査を行い、欠損値の無い474人のデータを分析した。3月の高校入学説明会時に質問紙を配布し、入学式に回収した。なお、安定性を確認するための第2回調査は、高校入学後の10月にB高校に入学した生徒220人のみを対象に実施した。

調査内容：Downey, et al.(1998)が開発したCRSQ等を参考にして、中学校教師3人の協力を得て、日本の中学生になじむ表現で、「仲間からの意図的な拒否を憶測する」「仲間関係に関する不安」「仲間からの拒絶に対する敵意」という3側面から拒絶感受性を測定するための14項目からなる元尺度を作成した。階層型学級適応感尺度(三島, 2006)・仲間集団指向性尺度(三島, 2008)を中学生用に改訂したものと、伊藤・松井(2001)が開発した「学級風土質問紙」を参考に学級の良好な雰囲気を測定する3項目を、妥当性を検証するために用いた。

##### 高校生用拒絶感受性尺度

A県立B高等学校に在籍する生徒651人を対象に、小学校高学年用・中学生用と類似の方法で作成した尺度の妥当性を検証した。なお、分析には欠損値がない生徒628人のデータを用いた。

#### (2) 「いじめ」被害者・加害者が入れ替わるメカニズムの検証

小学生・高校生等から収集したデータを分析し、モデル(図1)の検証を行った。

##### 小学生を対象とした研究

A市立F小学校4～6年生180人を対象に2回の調査を行った。さらに、第2回調査時に学級担任に対して、学級のすべての児童について、関係性攻撃傾向について5件法での回答を依頼した。

#### 高校生を対象とした研究

A 県立 B 高等学校 1 ~ 3 年生 736 人を対象に 2 回の調査を行った。さらに、第 2 回調査時にホームルーム担当教師に対して、学級のすべての生徒について、関係性攻撃傾向・直接的攻撃傾向について、それぞれ 5 件法での回答を依頼した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 拒絶感受性

##### 小学校高学年の結果

尺度の因子構造：17 項目の評定値をもとにして探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。固有値の推移（5.28 1.59 1.45 0.98 ...）や解釈可能性の高さから 3 因子解を採用した。「いちばん仲がよい友だちとの関係も、実は、それほどしっかりしたものではないと思う」「友だちとの関係は、不安定だと感じる」などの 8 項目が第 1 因子に対して大きな負荷量を示したことから、第 1 因子を「対人関係の不安定感・拒絶の予期」因子と解釈した。

「仲間はずれにされそうな雰囲気を感じると、不安な気持ちが強くなる」「無視されたり、仲間はずれにされたりすることに、わたしは敏感である」などの 4 項目が大きな負荷量を示したことから、第 2 因子は「拒絶に対する不安・過敏」因子と解釈した。

「無視されたら、無視した相手を無視する」「通学分団で、入学したばかりの 1 年生の子と手をつなごうとした時、その 1 年生が、つなごうとした手をふりはらうと、相手が 1 年生でも怒りを感じる」などの 4 項目が大きな負荷量を示したことから、第 3 因子を「拒絶に対する怒り・反撃」因子と解釈した。

それぞれの因子の解釈に用いた項目を観測変数とした 3 つの因子からなるモデルを作成して検証的因子分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりは許容できる範囲であり（GFI = .93, AGFI = .91, CFI = .93, RMSEA = .058）、この 3 因子による尺度構成とした。3 因子による尺度構成は、Downey & Feldman (1996) が拒絶感受性の定義として挙げた「他者から拒絶されることを不安感を伴って予期しやすく、拒絶されることに敏感であり、拒絶に対して過剰に反応する」という 3 つの特性に対応しており、Downey & Feldman (1996) の拒絶感受性に関する枠組みを反映したものとなっている。

妥当性の検証：「対人関係の不安定感・拒絶の予期」下位尺度得点が高い、対人関係の不安定感や拒絶の予期を感じやすい児童は、所属している学級に関しても排他的な雰囲気を感じやすいということが予想される。また、こうした児童は、既存の友人に対する信頼感が乏しいために、「困ったことがあったら友だちに相談する」「友だちから自分は大切にされていると思う」などといった友人関係に関連する適応感が低いことも予想される。これら 2 点を検証するために、「対人関係の不安定感・拒絶の予期」下位尺度得点と、排他

的な学級雰囲気得点、および、階層型学級適応感尺度の友人適応得点との相関係数を算出した。その結果、排他的な学級雰囲気得点との間には比較的強い相関 ( $r = .49$ ) がみられ、階層型学級適応感尺度の友人適応得点との間にも比較的強い負の相関 ( $r = -.47$ ) がみられた。

「拒絶に対する不安・過敏」下位尺度得点が高い、拒絶されることに対する不安が強く拒絶されることに敏感な児童は、そうした不安感を低減するために、親密な関係にある友人に対する独占的な親密関係指向を強くもっていることが予想される。また、こうした児童は、拒絶されることに対する不安が強く過敏であるために、「くよくよ悩む」「おなかが痛くなったり、下痢をしたりする」などといった、心身の健康に関連する適応感が低いことも予想される。これら 2 点を検証するために、「拒絶に対する不安・過敏」下位尺度得点と、独占的な親密関係指向得点、および、階層型学級適応感尺度の心身の不健康得点との相関係数を算出した。

その結果、独占的な親密関係指向得点との間には比較的強い相関 ( $r = .42$ ) がみられ、階層型学級適応感尺度の心身の不健康得点との間にも、比較的強い相関 ( $r = .58$ ) がみられた。

信頼性の検証：尺度の内的整合性を検証するために、3 つの下位尺度をそれぞれ構成する項目の評定値から係数を算出した結果、「対人関係の不安定感・拒絶の予期」下位尺度と「拒絶に対する不安・過敏」下位尺度に関しては十分な値であったが、「拒絶に対する怒り・反撃」下位尺度に関しては低い値であった。本研究に関連する 2 回の調査に回答し欠損値がなかった児童 152 人のデータをもとにして、調査時期ごとに 3 つの下位尺度得点を算出し再検査信頼性を確かめるために相関係数を算出した結果、すべての下位尺度得点について、比較的強い相関がみられた ( $r = .50$ )。

##### 中学生の結果

尺度の因子構造：平均値が 1.5 未満の 4 項目を除外した 10 項目について探索的因子分析を行った後、検証的因子分析を行い（GFI = .98, AGFI = .96, CFI = .97, RMSEA = .050）、3 因子解を採用した。第 1 因子を「対人関係の不安定感」因子、第 2 因子を「拒絶に対する不安・過敏」因子、第 3 因子を「拒絶に対する怒り・反撃」因子と解釈した。

妥当性の検証：「対人関係の不安定感」下位尺度得点と、良好な学級雰囲気得点との間には、比較的強い負の相関 ( $r = -.50$ ) がみられ、階層型学級適応感尺度の友人適応得点との間にも比較的強い負の相関 ( $r = -.42$ ) がみられた。「拒絶に対する不安・過敏」下位尺度得点と、独占的な親密関係指向得点の間には、比較的強い相関 ( $r = .53$ ) がみられ、階層型学級適応感尺度の心身の不健康得点と間にも比較的強い相関 ( $r = .52$ ) がみられた。

安定性の検証：2回の調査に回答した生徒のデータの相関係数を算出した結果、すべての下位尺度得点について、比較的強い相関がみられ( $r = .43$ )、尺度の安定性が示唆された。

#### 高校生の結果

尺度の因子構造：16項目の評定値を因子分析し、3因子解を採用した。「いちばん仲がよい友人との関係も、実は、それほどしつかりしたものではないと思う」「友人との関係は、不安定だと感じる」など8項目が第1因子に対して大きな負荷量を示したことから、第1因子を「対人関係の不安定感」因子と解釈した。「仲間はずれにされそうな雰囲気を感じると、不安な気持ちが強くなる」「無視されたり、仲間はずれにされたりすることにわたしは敏感である」など3項目が第2因子に対して大きな負荷量を示したことから、第2因子を「拒絶に対する不安・過敏」因子と解釈した。「無視されたら、無視した相手を無視する」「自分を無視した相手のことは、忘れない」などの3項目が第3因子に対して大きな負荷量を示したことから、第3因子を「拒絶に対する怒り・反撃」因子と解釈した。因子の解釈に用いた項目を測定変数とする3つの因子を潜在変数としたモデルを作成し検証的因子分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好であった ( $GFI = .94, AGFI = .92, CFI = .92, RMSEA = .067$ )。

妥当性の検証：学校生活に対する適応感を、友人適応・学習適応・心身の不健康という3つの側面と、これらを統合する「総合的適応感覚」でとらえる階層型の適応感尺度、極めて親しい特定の仲間との親密な関係を背景に、その関係には属さない第三者に対する排他的な考え方や行動傾向の強さを示す「独占的な親密関係指向」、さらに、学級内にある仲間集団の排他的な雰囲気の状態を生徒が総合的にとらえる「学級の排他的な雰囲気」に関する調査も実施して妥当性を検討した。

「対人関係の不安定感」下位尺度得点の高い生徒は、安定した友人関係を保持することが難しいため、友人関係に関連する適応感が低いと考えられる。また、この尺度得点の高い生徒は、学級内の他の仲間集団に関して、より強い排他性を感じることが予想される。「対人関係の不安定感」下位尺度得点と、友人関係に関する適応感指標とは、負の相関( $r = -.40$ )、「学級の排他的な雰囲気」とは、比較的強い正の相関( $r = .48$ )がみられた。

「拒絶に対する不安・過敏」下位尺度得点の高い生徒は、不安や過敏傾向を強く示すことが予想され、心身の不健康度が高く、拒絶されることへの不安から、特定の仲間に対する独占的な親密関係を強く求めることが予想される。「拒絶に対する不安・過敏」下位尺度得点と、心身の不健康に関する適応感指標との間には比較的強い正の相関( $r = .58$ )、「独占的な親密関係指向」との間にも比較的強い正の相関( $r = .48$ )がみられた。

## (2) モデルの検証

### 小学校高学年の結果

小学校高学年児童等を対象に行った調査により収集したデータを利用して共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりは良好だった ( $GFI = .98, AGFI = .94, CFI = .98, RMSEA = .051$ )。第1回調査(年度当初)で測定した拒絶感受性(F1・F2)は、第2回調査(年度末)で測定した「いじめ被害」に影響を与えることが示唆された。さらに、「いじめ」被害の程度は、教師評定の関係性攻撃傾向に直接的な影響は与えないが、拒絶感受性(F3)に影響を与えることを通して、間接的に影響を与えることも示唆され、これらの結果は、拒絶感受性が「循環型いじめ」に関連する可能性を示すものである。

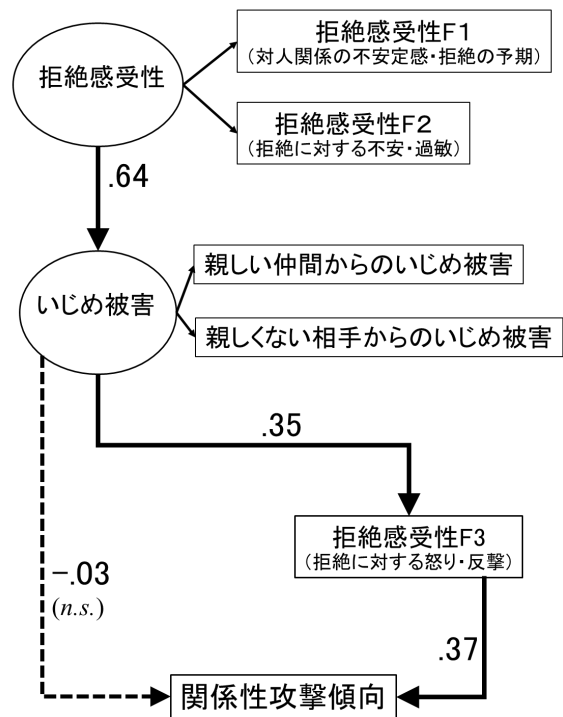


図2 小学校高学年を対象とした調査結果

### 高校生の結果

高校生等を対象に行った調査により収集したデータを利用して共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりは良好だった ( $GFI = .95, AGFI = .92, CFI = .98, RMSEA = .037$ )。第1回調査(高校入学直前)で測定した拒絶感受性(F1・F2)は、第2回調査(高校入学後半年が経過した段階)で測定した「いじめ被害」に影響を与えることが示唆された。さらに、「いじめ」被害の程度は、教師評定による生徒の加害傾向に直接的な影響は与えないが、拒絶感受性(F3)に影響を与えることを通して、間接的

に影響を与えることも示唆され、これらの結果は、拒絶感受性が「循環型いじめ」に関連する可能性を示すものである。

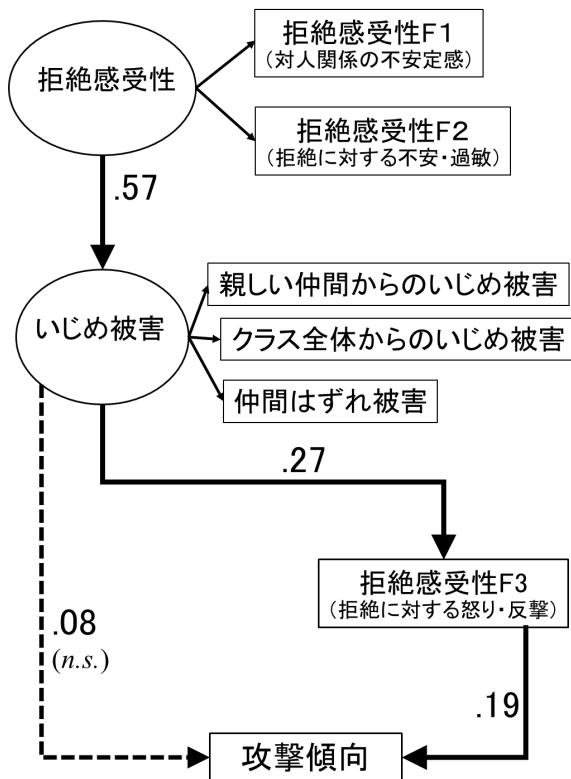


図3 高校生を対象とした調査結果

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

三島浩路, 「循環型いじめ」に関する研究, 日本学校心理士会年報, 8, 87-97, 2016, 査読有り

三島浩路・橋本秀美, 仲間集団に対する指向性や学級雰囲気といじめの関連 - 中学1年生を対象とした調査から, 中部大学現代教育学部紀要, 8, 9-17, 2016, 査読有り

三島浩路, 中学生の「いじめ」被害と発達障害傾向・学校適応, 中部大学現代教育学部紀要, 6, 15-33, 2014, 査読有り

〔学会発表〕(計 8件)

三島浩路・吉田恵子, 「循環型ネットいじめ」に関する研究 - 中学生・高校生を対象とした調査, 日本教育心理学会, 2016年10月8日, かがわ国際会議場(香川県・高松市)

三島浩路, 「循環型いじめ」に関する研究(2) - 高校生の拒絶感受性との関連を中心に, 日本社会心理学会, 2015年10月31日, 東京女子大学(東京都・杉並区)

三島浩路, 中学生用拒絶感受性尺度の開発, 日本カウンセリング学会, 2015年8月30日, 環太平洋大学(岡山県・岡山市)

三島浩路, 循環型いじめに関する研究 - 拒

絶感受性に着目して, 日本教育心理学会, 2015年8月27日, 新潟コンベンションセンター(新潟県・新潟市)

三島浩路, 小学生用拒絶感受性尺度の作成, 日本教育心理学会, 2014年11月7日, 神戸国際会議場(兵庫県・神戸市)

三島浩路, 拒絶感受性尺度(高校生用)の作成, 日本グループ・ダイナミクス学会, 2014年9月6日, 東洋大学(東京都・文京区)

三島浩路, 「不器用」「こだわり」といじめ被害等との関連 - 中学生と保護者を対象とした調査結果から, 東海心理学会, 2014年5月24日, 岐阜大学(岐阜県・岐阜市)

三島浩路, 主体的行動力・非影響性といじめ被害との関連 - 高校生を対象とした調査結果から, 日本応用心理学会, 2013年9月14日, 日本体育大学(東京都・世田谷区)

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

三島 浩路 (MISHIMA, Koji)

中部大学・現代教育学部・教授

研究者番号: 90454371